

恋するデザイン 1

Y u i & Y o u

斉河 燈

Tob Saikawa

Eternity



エタニティ文庫

C o n t e n t s

恋するデザイン1 5

僕の可愛いひと 253

彼女の本音と僕の嘘 287

恋するデザイン1

母性保護論争、なんてものが起こったのは百年ほど前のことらしい。歴史や思想に疎いあたしは、ぶつちやけ詳しい内容までは把握していない。

しかし、与謝野晶子だったか平塚らいてうだったか、今ではお歴々とも言うべき方々が女性の社会的地位向上のために議論した時代があったのだ——と、失礼ながらすこぶる曖昧に記憶している。

それから時は流れ流れて、平成の世、日本。

彼女達に現代社会における女性の生き様はいかなるものかと問われたならば……あたしは、「戦々恐々」とでも言ってみよう。

世の中、恐ろしいことばかりなのだ。

「あのう先生、ランチ、どうしますか」

事務所として間借りしている雑居ビルの一室、缶詰になっていた部屋がそろりと開封

され、気弱な質問がひとつ投げ込まれる。ついに、ついに外の世界へと、あたしの秘密が流出してしまったのだと思った。

朝から華麗に「考える人」のポーズを決め続けるというギネスへの挑戦——ではもちろんなくて、デスクを前に頭を抱えたきりさっぱり仕事を進めた形跡がない、という秘密が。

「いらない」

うしろめたい気持ちもあって、あたしはそのままの格好で答える。

スチール製の扉は年代もので、蝶番はきいきい悲鳴のような音を立てる。歯の根がゆるむというか、背筋を毛虫が這うというか、とにかく体中の不快感という不快感を余すところなく呼び覚ましてくれる音だ。

「……いくら締め切りだからって、なにか食べないと倒れますよう」

声の角に視線だけを移動させると、心配そうに眉尻を下げる子ウサギちゃんが一羽、ちらと見えた。子ウサギちゃん、というのはいちろん例えであって、ここがメルヘン世界、というわけじゃあない。

所在地は都内某所。

そしてこの部屋は小野原デザイン事務所の本拠地——つまりあたし、小野原惟ちなみに二十九歳——が代表を務めるオフィスなのである。

ついでに子ウサギちゃんの名は水元香という。三つ年下のアシスタントで、外見はどこからどう見ても可憐な少女でしかないのだけれど、一応性別は男だ。

確かめたことはないけれど。ついうっかり間違えたフリをして握ってみようかなあとは、思わないこともない。

「昨日もウイダーinゼリーしか摂ってないし、僕、心配で心配で」

「あのね、あたしの仕事部屋には来るなど何度も言ってるでしょうが。来週納品のチラシ、アイデアは固まったの？」

「ま、まだです。でも僕、先生のことが」

ぐずぐずと鼻声で、いかにも健気な様で訴えかけてくるものだから、あたしは耐えかねて鷺のマークの茶色い空き瓶を放った。

「うわあっ、危ない！」

ちなみにこれが朝からのマイ摂取カロリーの大半である。

「あたしを見張る暇があるなら、とっとと働きなさい！」

「ひいっ」

しっしっしと追い払って足先でドアを閉める。そうしてあたしはまた真っ白なクロックキーブックの前に、ひとり馬鹿でかいため息を零すのだった。

あと二十四時間でプレゼンの日がやってくる。

もう、間に合うかどうかという瀬戸際だ。それこそランチなんて悠長に食べている場合じゃあないということを感じていただきたい。

かのレイモンド・ローウィ(たばこの「ピース」や「ラッキーストライク」)、「コカ・コーラ」のデイスペンサーなどをデザインした人ね)に憧れてこの道を志したあたしは、巷に出回る工業製品——つまりインダストリアルデザイン——を主として手がけている。そう、「デザイン」というとファッションだと思われがちだけれど、あたしの専門はプロダクトなのだ。

今はまだ仕事を選べる立場ではないから、お菓子のパッケージやチラシ、家具家電の類いなど、ありとあらゆるものを請け負ったりもしている。

華やかに見えて厳しい世界だ。とはいえ、女だからと言ってナメられたくはないし、妥協したら終わりだと思う——なんて、理想を語っていたら、すでに三十路は目前に迫りかけていた。

これはいわゆる崖っぷちってやつだ。と一応、自覚はしている。ここ数年、彼氏はいないし、デートの予定だって皆無なのだから。

でも、言い訳をするわけではないけれど、この事務所を立ち上げてから、あたしにとっ

てなにより大切なのは、目先の締め切りとスタッフの生活。顔もわからない未来の旦那さまよりよっぽど現実的だし、ずっと切実だと思う。

てなわけで最近痛感しているのは、夢を追うのはある程度若いうちでなければできないのに、女にとつてその期間はあまりにも短いということ。

不公平だ。男に生まれたかった。恨むよお母さん。ついでに言わせてもらえるなら、お見合い写真を送ってくるの、いい加減やめてよ。いえ、やめていただけますか。やめていただけたら助かります。

「ううううう」

腹の奥底から声を絞り出し、頭を抱える。こんな姿、人に見られようものなら一一九番され、救急隊が駆けつけること必至だ。

今、あたしを悩ませているのは、小さなペットボトル飲料のパッケージ及びボトルのデザイン。

コンセプトは「健康」で、クライアントによると、セールスポイントは特許を取得したばかりの製法らしい。

それがどれだけ努力を積み重ねてでき上がったものなのかは、先週、研究室の方の熱弁でずっしり受け止めたばかりだ。失敗に失敗を重ね、開発に五年の歳月を要したとか。だからあたしはそんな風にして完成した商品が、いかに体に優しいかを上手に消費者

に伝えなければならぬ。いわばメッセンジャーの役割、それがデザイナーの仕事なのだ。でも、考えれば考えるほど迷う。

いつだってこうだ。自信なんて毎回ない。こんな自分が「先生」だなんて、笑える話。ちょこつと雑誌に取り上げられて、ちょこつと名前が売れただけ。中身がご立派になつたわけではないのに。

すっかり固まった体を背もたれに預けると、すりガラスの窓越しに真っ赤な夕日が見えた。

アイデアの降臨待ちで日が暮れた時の絶望感つたらない。死にたくなる。

気付けば着ているニットは毛玉だらけだし、部屋から一歩も出ないからつて日がなノーメイク。髪は伸び放題だし、ああ、前回美容室に行ったのはいつのことだっただろう。負のスパイラルで落ち込んで、頭も真っ白。

きれいさっぱり、ノーアイデアだ。

「……もう終わりだ。あたしの想像力、死んだ……」

でもってこんな独り言ばかり言ってしまうあたしは、女としても終わっている。誰か、ミイラにでもしてやつてちょうだい。

デスクの上で紙を千切りはじめた途端（飽きるとついやっちゃうクセ）、ドアがかちゃりと開いた。見れば、潤んだ瞳がそこから覗いている。

「先生、死んじゃ嫌ですよ」

「おまえはストーカーか、杳」

彼はもともと同じデザイン事務所で働いていた後輩で、あたしが独立すると言ったらくっついてきた奇特な人間だ。

ふわふわとした空気感のある天然パーマの髪は栗色で、大きな目はくっきりとした二重と長いまつげに飾られている。まるで、ルーベンスの描く天使のごとき容貌なのだ。あたしが本気を出してエステに通ったとしても、絶対にあんなふうにはならない。

身長も百六十センチと小柄だし、男とは思えないほど繊細だし、思いやりがあつて気遣いができて、同僚の女の子にも受けがいい。

要するに、あたしとは正反對のヤマトナデシコな男、それが杳なのだ。

と、杳の背後から子ウサギちゃんその二——アシスタントの女の子・いっちゃんが言う。「先生、杳ったら先生がご飯食べるまで自分も食べないって断食してるんですよ」

「はあ？」

なんて無駄なことを。呆れてそれ以上ものが言えなくなったあたしを見て、杳は青くなって彼女を振り返り、ひどいよ、と泣きそうな声で訴えた。

「内緒にするって約束したじゃないかあつ」

女子高生か。つついとおばさん目線で冷ややかに見てしまう。と、彼はぶりぶり怒つ

た後、ふたたびあたしに向き直った。

「そうだ、あの、先生これ」

目の前に差し出されたのはあたし愛用のデザートプレートだった。そこには丸くてこんがりきつね色の物体が山と盛られている。

「む、なに？」

むせ返るほど甘い、バニラの匂い。その向こうで杳はほわほわと柔らかに笑う。思わずふにゃふにゃと情けない顔で笑い返しそうになった。

「ドーナツです。休憩時間に揚げたんですけど、いかがですか」

「揚げた、って、杳が？」

「ハイ。ホットケーキミックスがあつたので」

ああ、そう言えは。

ホットケーキが無性に食べたくなって買ったはいいけれど、作るのが面倒で放置し続けた結果、賞味期限が切れそうになっていたアレか。

「先生、甘いものお嫌いでしたっけ」

「いや、そうじゃないけど」

甘い味の揚げ物というのが苦手というか、締め切り前は胃がキリキリするというか——でも。

「邪魔なら片付けますよ」

「うん、もうわ」

作ってもらったものを、食べないわけにはいかない。覚悟を決めてプレートを受け取ると、

「ありがとうございますっ」

そう言っ頭を下げたのは杳だった。お礼を言わなければならないのは、あたしのほうなのに。

「やっぱり先生は優しいですね」

綿あめみたいな微笑み。あたしには到底できない表情だ。

「優しい？ あたしが？」

「はい。やさしいですよ。だって、先生は誰かが作ったものを絶対に無駄にしないでずもん。お仕事の時も、そうじゃない時も」

「そりゃ、自分も作り手の端くれとして」

「僕、先生のそういうところが大好きです」

「そ、ありがと」

砂糖まみれのそれをひとつ頬張ると、やさしくて懐かしい味がした。心が少し、ほどけた気になる。そういえばこういうの、実家を出て以来食べていなかったっけ。

「うん、美味い」

頬を緩めたあたしを前に、杳は嬉しそうに目を細める。

「よかったあ。じゃあ、明日からランチも出前じゃなくて僕が作りますね。夕飯も、夜食も」

「なんで」

「そうしたら先生、食べないわけにいかないでしょ」

痛いところをつかれて焦あせってしまう。

「そ、そりゃありがたいけど、杳にはアシスタントとしての本分ってやつがあるでしょ。デザインがやりたくてここに来たんだよね？ そんな、雑用係みたいな面倒なこと」

「面倒だなんてとんでもない。僕、料理好きですし。仕事も疎あそかにはしませんから、ね？」

「まあ、男だっ家庭事ができるほうがモテる時代だけどさ」

「なら任せてもらえませんか、先生の食事」

杳の必殺「さらさら真剣まなざし攻撃」にうつかりKOされそうになって、あたしは顔を背ける。

「気持ちはあるがたいんだけど、これ以上甘やかされると……あたし女としてヤバいの」

「ヤバくなんてないです！ 先生はいつだって凛々りんりんしくて、仕事に一生懸命で、カッコよくて、みんなの憧れあこがですから」

「……そうかなあ」

むずがゆい。褒められて悪い気はしないけれど、照れが先立って素直に喜ぶことができない。

杏はいつも女の子に対してこうなのだろうか。優しすぎていつか損するよ、なんて勝手なことを思った。

すると彼は珍しく自信満々の顔で言う。

「だから余計なことは心配せずに、先生は思いっきり仕事に打ち込んでいいんです」

「そう……？」

衝撃だった。そんなことを言われたのは初めてだ。

両親にはいつだって「仕事は一生のパートナーじゃない」「仕事と結婚するのか」なんて叱責されるばかりだったから。

思いっきり打ち込んでいい、なんて、ああ、なんだか泣きそう。

「そうですね。くれぐれも、無理は禁物ですけど」

こうして、杏は優しい笑顔を置き土産に部屋を出ていった。

温かくて甘いドーナツを平らげ、あたしはふうと息を吐く。

糖分を補給したお陰か、休憩を入れたお陰か、その後の仕事がかどったことは言うまでもない。ご飯はやはり、きちんと三食たべなければと反省した次第。

「お疲れさまです。ランチ、できましたよお！」

杏はというと、翌日からさっそくマイエプロンを持参し、料理の腕をふるってくれた。十六雑穀のご飯や煮しめなど、ヘルシーな料理はありがたい限りだ。アシスタントの女の子たちの評判も上々で、その腕前もさることながら、女心を熟知したメニューには感心してしまう。

「んー、今日も最高っ」

こうして、ランチタイムに幸せを嘔みしめる日々が始まった。

(あー、香みたいな嫁が欲しいわ)

そう心の中で呟いたあたしにおかわりを差し出しながら、彼は得意の綿あめスマイル。そして言った。

「僕以外の男性社員、採用したらダメですよ」

「どうして」

「この先もずっと、先生のご飯を作る男は僕だけですからね」

……うん？

Q…部下に手を出そうとしている（むしろ出した）フトドキモノはこの誰でしょう。
A…小野原の惟とかいう女、つまりそれはあたしです。

「はあ」

二十九歳独身、あたしは今、人生の岐路に立たされている。

一方は婚活、つまり結婚コース。仕事はほどほどに、旦那さまを支えて生きていく堅実な人生だ。

もう一方は仕事一筋、生涯独身コース。親が煩いのさえ我慢すれば、自分の時間を楽しめる悠々自適の人生をさす。

しかしながらその両方に背を向けて、人の道を外れようとしている自分がここにいる。アカン、アカンで——脳内でナニワのオバチャンAが言う——アンタの人生、間違うとるよ。ロクな死に方せえへんで！ やめとき！ 年下の男をつかまえて一生下働きさせようだなんて！

「うわあ！ すみません、大遅刻です。待ちました？ 服、選ぶのに手間どっちゃって」公園のあたしがいるベンチに駆け寄ってくる杏は、タイトなパンツにゆるっとしたニットパーカーを羽織っていて、若々しいカジュアルックだった。いつもの通勤服より幾分動きやすそうに見える。マールンカラーのふわふわヘアと綿あめより糖度の高そうな笑顔は今日も健在だ。

「い、いや別に待つちやいないけど、きよ、今日も可愛いね杏……」

「ありがとうございます。先生こそ、そのワンピース、すごく似合っています。今日のオシャレ、僕のためですよね？」

「そ、そ、そん……」

護摩でも焚いているかのように顔全体が熱くなる。

思わず背を向けて早足で進むあたしは中学生日記もまっ青の純情ぶりだった。

否定しようとしてもしきれない。そうだ、あたしは今、杏を完全に異性として意識しているのだ。

昨日の朝までは可愛い弟、いや妹くらいにしか思っていなかったのに、……キス一つものはずごい。たかがキス、されどキス、だ。単なる皮膚の接触なのに、どうしてだ。

つい反芻するように唇を撫でたら、ますます緊張が高まって、普通の表情の作り方が

すっかりわからなくなった。

事の起りは、数十時間前にさかのぼる。

「あー、最近キスしてないなあ」

アシスタントその二・いっちゃんがそんなことを言い出したのは、ランチの真つ最中だった。

ちなみにメニューは、おからのコロッケとキャベツの千切り、しじみのみそ汁、玄米ご飯におしんこで、もちろん杓のお手製だ。

「私、軽く干物ですよ。先生は恋ってしてます？」

干物だなんて、あたしより二つも若い子が言う台詞じゃあない。

いっちゃんは本名を本宮いづかという。地味だけれど可愛い、花に例えるならポピーみたいな女の子だ。ファッションはツインニットと膝丈スカートが定番で、ミニ丈のものを穿いているところはほとんど見ない。

「あのね、そんな暇があるように見える？ 第一、いっちゃんが干物なら、あたしなんて化石よ化石。博物館に寄贈されてやるっ」

「そんなあ。あ、メーカーの三木さんはどうです？ この間デートに行ってたじゃないですか」

「あれは単なる接待。あたし、ああいうスーツがピチッとしたスカした野郎は好きじゃないし」

「うわ。厳しい、先生」

思えばこのとき、あたしは杓が男だということをすっかり失念していた。いや、それを言うなら杓の前で平然とキスの話題なんてふってくるいっちゃんこそ、恐らくそのことを忘れていたのだと思うけれど。

その杓はというと、テーブルの隅で、居心地悪そうに玄米ご飯をもそもそ咀嚼していた。

「じゃあ先生の好みって？ どんな人となら結婚したいって思えます？」

「……口煩くない人。あたしに主婦業を押しつけないような、仕事が忙しくて文句を言わないような」

「それって杓じゃないですか」

いや、だいぶ違うような気がするけど。

あたしが言いたいの、例えば一緒にいて「仕事と俺、どっちが大事なんだよ」とか子供じみたことを言わない人で、デート中に仕事のことを考えていてもそつとしておいてくれる人で、記念日を忘れても電話をしばらくかけなくても、温かく見守ってくれる懐深き男なのだ。

相手も同じように仕事で忙しければなお良いと思う。痛みを分かち合えるし、相互理

解がしやすいくらいから。……とはいえ、最後に付き合った男とはその忙しさが理由で別れたんだっけ。

「せっかくふたりともフリーなんだし、一回くらいデートでもしてみたらどうです」

「いっちゃん、あのね」

杳はまずかろう、杳は。あたしは前歯を見せて苦笑い。

だってどう考えたって、あたしと杳じゃあらゆる意味でデコボコで、つり合いつてものがまるでとれない。

それに、こんな可愛い子に手を出したら逆セクハラで、めでたく犯罪者の仲間入りができそうだな。

「ちょうど今日の納品の後、連休ですし。ね、杳もそう思うでしょ」

「え、えと、僕は、先生さえよければ」

「はい、決まりですよ先生っ」

「……待てこら」

半分白目になりながらつつこんだものの、仕事を押していたからそれ以上雑談をしている暇はなくて、はつきり断るには至らなかった。

しかしあたしは中止にする気、満々だった。だってあの状況じゃ、杳は断りたくても断れなかっただろうし。そこで、仕事終わりに彼を缶詰部屋へ呼び出すことにした。いっ

ちゃんに知られぬよう、こっそりパソコンにメールを送って。

「あのさ杳、明日のことなんだけど」

お休みの日くらい上司の顔を忘れてゆっくりしなよ。と言いたかったのに、彼の行動は驚くほど早かった。

「お店なら、インターネットで予約しておきました。最近できたばかりの有機野菜のレストラン、すっごく美味しいんですよ。待ち合わせ場所は向かいの公園でいいですか？」

「はいっ!？」

「じゃあ決定ですね」

この時のあたしの顔を写真に撮ったら、両目がぼつりと見事な点になっていたと思う。「嬉しいな。夢みたいですよ。きっと通じないだろうなって思ってたから」

「な、なにが」

「僕が先生を好きってこと」

さらっと告白されて、今度はその、点になった目が飛び出そうになる。よ、杳があたしを、好き？ 嘘でしょ。

いや、でもそういえば何度か、大好きとかなんとか、言われた気がしないでもない。そんなことを思い出したら、むしろ自分の鈍感さに啾然あぜんとした。

いつからだ。なんでだ。こんな女に、どうしてだ。「初めて会った日から、ずっと憧れてたんです。有能なのに気取ったところがなくて、気さくでカッコよくて、素敵な人だなんて。だから、だから……」

感極まったのか、彼はつぶらな瞳に涙をたっぶり浮かべる。

「デート、できるだけで僕、うれしくて……」

「よ、杳」

「こんなの奇跡です。あ、りがと……ございます」

「このくらいのこと奇跡とか言われても。」

健気すぎる彼を見ていると、どうにもうしろめたくなってくる。自分が世間擦れしすぎているせいだろうか。だとしたら、せめて杳にはこのまま無垢^{むく}でいてほしいものだわ。あたしは姉気分^{ねい}で、杳の頭をヨシヨシと撫^{なで}でた。空気感のあるくせ毛はなんとも言えない手触りで、やはり子ウサギを彷彿^{ほうふつ}とさせる。

「せんせ……」

「うん、とりあえず泣くのはやめよう」

まあ、デートくらいならしてやってもいいか、なんて同情半分^{のぞ}で彼を覗き込むと、涙に濡れた瞳がぱつとこちらを見上げた。

ドキッとする。男だからというより、まるつきり少女の泣き顔に見えて。え、なに、

この感覚。

そして、まさしくその瞬間だった。隙^{ひま}について、杳が少し背伸びをしたのは。

「……」

接触する唇と唇。

驚いたあたしの首筋に腕を回し、杳は器用に角度を変え。遠慮なく割り込んできた舌の感触に、声を上げそうになった。

(ん……っ、な、……なんだ、これは)

そう思ったのは、キスが久しぶりだったせいじゃない。

彼のキスはとろけそうに甘くて、つまるところ、うっとりするほど上手かった、のだ。腰が抜けるかと思った。

就寝する頃になって気付いた。そうだ、杳は手先が器用だったのだ。舌先まで器用だとは、さすがに予想できなかったけれど。

あれほど繊細なキス、初めてかもしれない。ガツガツした余裕のない男たちとは違う、気遣いのかたまりのようなキス。

もう一度、してみた、と言ったら変に思われるだろうか。欲求不満の年増が可愛い年下男子に手を出すのはまずい。それはわかっている。

なのに、あんなキスをする杳ならそれ以上のこともきつと——、なんて妄想がとまら

ないあたしはもう、つける薬のない某病やまいの重篤患者じゅうとくなのかもしれない。

そんなわけで、あたしは今困っている。

これはいわば、第三の選択肢だ。もし杳と付き合って、万が一、いや億がうまく事が運んで、兆が一結婚なんてことになれば、だ。

女としての幸せが手に入る上に、仕事もサポートしてもらえる。親も黙るだろうし、毎日ごはんも作ってもらえる。万々歳だ。これこそ、まさしく奇跡というやつじゃあなからうか。

引き換えに杳の人生を犠牲にすること、請け合いだけれど。だって、あたしといる限り永遠に部下のポジションは確定なのだし。

良いのだろうか、あんなに純粋な彼をあたしの人生に巻き込んでしまつて。

「あのですね、先生」

「な、なに」

「僕、便利な男でかまいませんから、これからもずっと側に置いてくださいね」
迷うあたしを後押しするかのようになり、杳は言った。

「先生のこと、一生支えるのが僕の夢なんです」

健気けんげすぎる。

あたしみたいな女にはもつたいたない相手だわ。そんなに優しいと本当に損をするからね。

けど、そこまで言うなら……出しちゃうよ。出しちゃうからね、手。

「……先生〴〵って呼ぶの、やめない？」

「え？」

「恋人同士なら、〴〵惟〴〵って呼んで」

ぱあつと目を輝かせる杳を見下ろし、あたしはとりあえずヒールの高さを下げるところから始めようと思った。

この時はまだ、予想もしていなかったのだ。自分がまさかこの、キスひとつで付き合いを了承してしまった小動物に身も心も翻弄ほんろうされる日が来るなんて。

3

「わあ、ついに発売されたんですね！」

仕事終わりの休憩室、杳は興奮を抑えきれない様子で女性向けファッション誌を捲めくる。辺りに銀粉をはたいたかのようにきらきら輝くつぶらな瞳は、到底二十六の男のもの

には見えない。その目に映っているのは、あたしがデザインを担当した腕時計の広告だった。

「感動です。こんな大々的に紹介されるなんて！」

「いや、それはメーカーが雑誌にタイアップ企画を持ち込んだからよ」

つまり広告費やらなにやらを払って、付録まで付けたわけだから当然の扱いなのだ。

さらに巻頭での掲載が可能になったのは、あたしがたまたまその編集長と旧知の仲だったからで、いわゆるコネってやつなのだ。いざという時にそれを活かすためには、パーティーに出席しておくに限る。面倒臭いこと、この上ないけれど。

「出版社に問い合わせが殺到してるって、さつき連絡が来ましたよ」

「そ。なら今日は安心して眠れるわ」

三日ぶりにね。

「お祝いにワインでもあげましょうか。僕、チーズ切ってきます」

「うん。みんなはどうする？ 飲んでく？」

夕食の Pasta、最後のひとくちを頬張りながら見渡すと、なぜだかみんな揃って呆れ顔。

「クリスマスイブに飲み会を催してどうするんですか。私、帰ります」

「邪魔者は消えますから、おふたりでこゆつくりー」

「え、や、ちよ、待て」

そんなつもりはなかったのに、アシスタントの女の子たちはあつという間に席を立つてしまった。去年はみんな飲み明かしたのに、薄情者め。

なんて、真の薄情者は事務所唯一の男子をモノにしてしまうあたしなのだろうけど。

「みんな帰っちゃいましたね」

「だねえ。杓は大丈夫なの？ 予定とか」

「……それ、わざと言ってるなら意地悪すぎますよ、惟さん」

むっとした杓は少しだけ男の顔をしていて、そんな彼に名前と呼ばれると照れ隠しで無表情になってしまふあたしは世界屈指の意気地なしなのだった。

わかっていても耐えきれない。

だって、ずっと可愛い弟、むしろ妹みたいに思っていた杓が、あたしの、こつ、恋人だなんて！

「ワイン、赤でいいですか？」

「うん。あ、そだ、美味しい生ハムがあるのよ。昨日、文具メーカーの松田くんにもらったんだけどね、スペインのなんとかっていうやつ」

どこにしまっただろう、記憶にない。冷蔵庫に入れたとは思うけれど、うっかりしまい忘れて常温で放置しているとしたら、すでに死亡確定だ。

「それならスライスして冷凍しておきましたよ。松田さん、最近よく来ますよね」

唇を尖らせて不満そうに言う杳を見て、あたしは咄嗟に口元を押さえる。失敗した。別の男にモノをもらったなんて話題ふるべきじゃあなかった。

「そ、そうかなあ。仕事、受けたからでしょ。ご機嫌伺いよ」
「昼時ばかり狙って来る気がします。ランチに誘うために」

さすが草食系と言うべきか、杳の観察眼はおなご級だ。普通の男より神経が繊細にできているのだろう。

実はこの間、松田くんから突然告白されたとか、言うべき？　こういうの、打ち明けておくべき？　でも、シヨックを与えそうだしなあ。迷いながらも、席に戻った杳に話しかける。

「あのさ、杳」

「僕、松田さん、きらいです」

嫌い——ね。素直すぎる一言に、あたしは言葉を呑み込む。

たいして強くもないくせに、杳はワイングラスを一気にあげた。

「僕の惟さんに、べたべたさわるから、きらいです」

とろんとした目で、ささやかな独占欲を覗かせる様は、可愛いことこの上ない。それに対し、ちよつとやそつとのアルコールでは顔色が変わらないあたしは、なんて可愛くないのだろう。

「……なら、杳もさわればいいのに」

小さく言つて、手酌をした。

付き合いだしてからしたことといえば、デートを一回とキスを数回。三十路直前のあたしには勿体ぶつて出し惜しみするモノなんてないし、誘ってくれさえすれば受け入れようと思つているのに——

「松田さん、カッコいいし、僕よりずっとお金持ちだし、背が高いし」

「こら杳、悪酔いしてるよ」

「惟さんも、つり合うし……」

子供っぽいことをブツブツ言うのも可愛い、とあたしは思っているけれど、彼にとつては深刻みたいだ。いっちゃんが言っていた。杳はあたしを満足させる自信がないから、なかなか先へ進めないでいるらしいと。

そんなの、別にかまわないのに。最初から杳まかせにしようなんて思つてはいないもの。とはいえ、それをこちらから切り出すのは、一歩間違えば嫌味になってしまうだろうから難しい。杳は、あんな外見でも一応は男なのだし。

……そうだなあ。

考えがないこともないあたしは、心の中で唸る。うん、まあ、とりあえず。

「あのね、一個だけ言わせてもらつていい？」

「……なんですカ」

完全にでき上がってるな、これ。そのほうが照れずに言えそうだから助かるけれど。

「最近キレイだね、付き合わないか、って言われたの、松田くんに」

「や、やっぱり僕の惟さんに、手を出そーとし」

「最後まで聞け」

あたしは杵の頭を上から鷲づかみにした。

「前はそんなこと、言われなかったの。最近よ、最近。だからね、正直に答えたわ。恋人ができたからだ、って。杵と付き合いたしたこと、ちゃんと話したわよ」

彼の頼りない肩越しには、見事な夜景が広がっている。仕事場ってのはいただけないけれど、一応はロマンチックなシチュエーションよね。

「これあげる。クリスマスプレゼント」

テーブルの下に置いておいた紙袋を差し出す。もしシラフだったら恥ずかしすぎて鼻血噴射間違いなしだ。

「世界にひとつしかない、例の時計の特注品」

製品は女性用で文字盤にピンクのラインストーンが施ほどこされているのだけれど、これは特別に頼み込んでデッドストックの淡いブラウンに付け替えてもらったのだった。

杵のイメージにぴったりだったから。

「ほ、僕に……?」

「他に誰がいるの。あたしの恋人は杵だけでしょ」

「あ、ありがとうございますっ、大事にします……!」

反応がいちいち可愛くて困ってしまう。思わずきゅんとなった胸を押さえると、いつもよりずっと速い脈を打っていた。おかしいな、あたしの乙女心、これくらいでときめくほどヤワな構造じゃなかったはずなのに。

すると杵は突如席を立ち、覚束おぼつかない足取りでアシスタント部屋に向かった。かと思うと、両手に余るほどの馬鹿でかい包みを抱えて戻ってきた。

「これ、僕からです。抱きまくらにでもしてください」

そう言っただけで赤ら顔をほころばせながら、こちらに差し出す。なんて健気けんげな、あたしのサンタクローズ。

ありがとう、と言いながら包みを開くと、彼の髪に似た手触りの、長毛のテディベアが姿を現した。こんな少女趣味なプレゼントをもらったのは生まれて初めてだ。

しかし……抱きまくら、ねえ。

「断る」

「ええっ、そんなあ」

「うちのベッド、せまいもん」

言って、あたしはグラスに残っていたワインを、決意とともに流し込む。

「コイツと寝たら……、なくなるよ」

これまでこっちから誘わなかったのは、あたしのほうが目上だからだ。杓には断りようがないし、逆セクハラにもなりかねない。

でも今夜は、今夜だけは。

「……杓が入る場所、なくなっちゃうよ。いいの？」

今夜だけは、アルコールのせいにしたって許されるはず。だって、聖夜^{イヴ}だもの。

「え、あの、ゆっ、惟さ……」

「あたし、明日の朝ごはんは和食がいい。杓が焼いた鮭が食べたい」

「ほ、本気ですか」

「わざわざこんな嘘、つかないわよ」

ああ、やつぱり恥ずかしい。恥ずかしくて死にそうだ。

クマの爛々^{ろんらん}と光る目が妙に気になって、リボンをそこに結び直した。見なくてよろしい。

「杓は本気じゃないの？ あたしのこと」

「そ、そういうわけじゃ」

「じゃあ、あたしとするの嫌？」

焦^{あせ}ってかぶりを振った彼は、ワインボトルを持ち上げようとしていたあたしの手をと

める。

「……お酒の勢い、じゃ駄目です。惟さんのこと、ちゃんと、大切にしたいんです……」
大切に、なんて言われたのも、初めてかもしれない。あたしは杓に驚かされてばかりだ。

「そ、それに、がっかりされたら困るし、僕、そういうの、あまり慣れてないから——ん！」

照れる彼に短くキスして、席を立つ。これ以上言い訳されたら、フォローに困る。

「あたしはそのままの杓がいいの」

「で、でも」

「いって言うてるんだからいいの。ね、酔いをさましながら帰りましょ」

ここまできたら、急がば回れだなんて言っていられない。もう待てそうにない。だって、可愛すぎるんだもの。

「……はい」

こうして、あたしは珍しくケンタッキーのパーティーバーレルより大きなものを聖夜^{イヴ}にお持ち帰りしたのだった。めでたし。

イベントの翌朝なんて大嫌いだ——あたしはずっと、そう思っていた。

それはなにもクリスマスに限った話じゃあない。飲み会や忘年会やお祭りごと、少数で過ごすパーティーも含め、あらゆるイベントに共通して言えること。

どこでどうハッスルしたのか、体中あちこちの関節がみしみし言うし、二日酔いは免れないし、ごくまれに見覚えのない部屋で寝ていたりするし……いや、それは過去の話か。とにかく、なんといつても、自分の浮かれぶりを思い出すだに、ずばっと切腹したくなるのだ。はしやぎまくって飲んだくれて、無礼講ぶれいこうだとか騒ぐ自分なんて、恥ずかしいっ
たらありやしない。

結果は目に見えているにもかかわらず、毎度毎度同じ失敗を繰り返してしまう短絡的な脳細胞が憎い。

だからあたしは、後悔とともに迎える翌朝なんて大っ嫌いだっただの。

「つて、思ってたんだけどな……」

またやってしまいましたよ。

と、ぼつり呟つぶやいて寝返りをうつ。

薄暗闇のなか、狭いベッドの端っこで携帯電話を開いたら、「12/25 03:10」と表示されていた。

ああ、いつの間に寝てしまったのだろう。暖房がつけっぱなしだ。伸びをしながらあくびをひとつ。しかし不思議と吐息からアルコール臭さはのぼってこない。

と、そこに柔らかな小動物がすり寄ってきて、あたしは重要なことを思い出した。

(そうだ、杓。クリスマスにかこつけてお持ち帰りしちゃったんだっけ)

ほんやりと浮かび上がる輪郭りんかくは、細い、というより淡い、と表現したくなるほど頼りない。指の腹でその線をなぞりながら、彼であることを再確認する。

妙な気分。

杓が、もう五年以上も単なる部下だと思っていた男が、いやむしろ、男とすら思っていないかった生き物が裸のまま、あたしに寄り添って眠っているなんて。

そつと、起こさないように抱きしめると、湯たんぽかと思うような温かさだった。昨夜は照れ臭かったけど、なんとというか、正直——驚いたというのが感想だ。

「あの、ほ、本当にお邪魔していいんでしょうか」
 玄関に到着してなお及び腰の彼を、あたしはリードするつもりで寝室へ連れ込んだ。
 そうだ、こちらが主導権を握っておくつもりだったのだ、そのときまでは。

しかし――

「――惟さん」

呼ばれたときにはすでに、彼はあたしの上の上にいた。ベッドに押し倒されたのだ、と気付いたのは、その柔らかな前髪が鼻先を掠めたからで、あの一瞬で押し倒した早技は本当に、忍術かと思うほど鮮やかだった。

「嫌だと思ったら、いつでもとめてくださいね」

え、ちよつと待て。今、一体なにが起きてるんだ。

「んっ」

と、油断していたところに、落ちてきたのは例の破壊力抜群なキスで。

「ん、ん……っ……ふ」

浅く、深く、繰り返し侵入してくる舌の動きはなめらかすぎて、口だけのいいチョコレートでも食べているみたいになる。やっぱり杓、キス、上手い。

「う……んっ」

淡い快感に思わず背を反らせると、そこにすかさず滑り込んできた手が、ブラのホッ

クを器用に外した。

(こんなこと、どこで覚えたのかしら……)

意外なことが多すぎて、しなくてもいい想像をしてしまう。あたしの前にも、恋人がいたのかしら、とか、これは初めてじゃないわね、とか。そんな脳ミソを戒めるように、杓はあたしの舌を甘噛みする。

痛くはない。むしろ、もっと強く噛まれたっていいくらい……

うつろしながら彼の首に腕を回すと、ふいにストッキングの上から太股を撫でられ、思わず悶えてしまった。

「ひ、あつ」

「惟さんの足、僕、好きです」

「いやだ、もう、く、すぐたいってば」

「ずっと、ずっと綺麗だなんて思ってたました」

「ん、やめ……そんなに見ないでよ。年増の足、よ……」

しかも細くも長くもない。すなわち、じっくりお見せするようなものではないのだ。なのに杓はかしくように体を屈め、足の形を確かめるように脛や甲にまでキスをしてくる。

あまりにも非現実的な光景に、めまいを覚えた。忠誠を誓われているみたいだ。

「綺麗ですよ。……いつも、見とれてました」

杏はそう言いながら自分の服をする脱ぎ出す。その後、あたしの服を脱がせにかかる動作は焦^{あせ}っているふうでもましてや乱暴でもなくて、こっちも思わず見とれるほど優しかった。

同じ優しさであらわな両胸をつかまれたら、我ながら情けないくらい細い声が漏れてしまった。

「……っあ、……っ」

こんな声をあげたのは何ヶ月ぶりだろう。

「あ、っは、……あ、ふあっ」

乳房の奥の方までほぐすような指の動き。どうしよう、気持ちいい。触れられてもいない先端が、勝手にツンと立ち上がる。

「惟さん……、惟さんの体、こんなに柔らかいなんて思わなかった」

「ん、……引き締まってなくてがっかりした？」

「いえ、そういうことじゃ。惟さんはいつもしゃきつと背筋が伸びてて……もつと強いイメージがあったから……こんなにどこもかしこも柔らかくて手触りがいいなんて予想外で」

こちらこそ、杏にそんな台詞^{せりふ}をささやかれる日が来るなんて予想外だったわ。

広げた両足の間に顔をうずめられて、あたしは浅く息を吐く。本当に予想外よ、こんな。

「ん、アっ……は、あ……んっ」

ソコを丁寧^{ていねい}に唇で押し広げながら、杏は舌先を動かす。感心してしまうほど器用な舐め方だ。時々、ものすごく感じる部分に触れられて、そのたび腰が跳ね上がった。

「あ……っ杏、……そこばっかり、っ」

「嫌、ですか」

「んうっ……ううん、好……き」

「なら、もう少し」

杏のことだから、もつとオクテだろうと思っていたのに。

様々な快感と倒錯感が入り交じって、体の芯^{こゝろ}からどんどん熱くなる。

「……惟さん、……っ」

それは彼も同じようで、数分後に見上げた顔にはもう、最初の余裕など微塵^{みじん}もなかった。滲^{にじ}む汗に気付いて、胸が詰まる。頑張ってくれたのよね、あたしのために。

「ね、杏、もう、しよう？」

まだだめですよ、とか準備が、とかごちゃごちゃ言う声は聞こえたけれど、あたしは腰を浮かせて、彼をさりげなくその位置まで導いた。

「大丈夫。今日……安全日だから」

「でも、まだ」

「お願い、これ以上焦らさないで」

ねえ、早く。

誘うように彼自身を滑らせて、ねだった。ねだるだけ、のつもりだった。

「ふ、あ」

なのに、昂りすぎたあたしの体は勝手にそれを浅く受け入れる。

あ、ダメ。せつかくの杓のリードを台無しにしちゃ……そう思うのに、とめられない。とめたくない。

彼にしがみつき、腰を突き上げて自らそれを奥まで呑み込んだ。根元までしっかり埋めたところで、とめていた息を吐く。

「ッ、よ、う……入ってる、わ……」

ああ、背筋が、逆撫でされているみたいにゾクゾクする。

「……っ、ゆいさ……温か、い」

「ンっ、杓、お願い、動いて……っ」

そこにいるんだってことを、もつと強く感じさせて。

腰を揺らしてねだると、内側をぐるりとかきまぜるように擦られた。痺れるような刺

激が、腰骨の内側に走る。

「ん、や、あああっ」

久しぶりだから？ あたし、感じすぎてる気がする。

「す、みません、痛かったですか」

「ち、がうの、……つきもち、よくて……」

「……よかった」

ゆるゆると船を漕ぐように揺らされて、同時に両胸を優しく弄られて、その上時々深いキスをされて、あたしの脳は自然と深く酔い始める。

「……っあの、惟さ、そんなに締めないでください……」

「え？」

「だ、から、ダメですってば……！」

杓はそう言って、突然動きをとめた。限界、とでも言いたげな顔で。

「す、みませ……っ——っ」

内壁が、さらに押し広げられる感じがする。なにが起こっているのか察したあたしは、彼を抱き寄せてささやいた。

「大丈夫。我慢しないで」

「……あ、の、でもっ」

「いいから。あたし、杓に、ナカ、いっぱいにされたい」
 言うや否や、奥にほとぼしるものを感じて目を閉じた。別にあたしが達したわけじゃないのに、なんだろう、この満足感。

「すみません……」

直後、杓が長い息を申し訳なさそうに吐いたから、汗ばんで張りついている彼の髪をかきあげて、額にちゅつとキスをした。可愛い。

「どうして謝るの。まだ終わりじゃないでしょ？」

「え」

「若いのに一度で打ちどめとか言わないわよね」

にっこり笑って言う。夜はまだまだ、これからよ？

それからあたしたちは順番にシャワーを浴びて、一息いれてからベッドの上でふたたび向き合った。

「よう」

さっそく先程のお返しをさせてもらおうと、あたしは体をかがめて舌を出す。そうしてソレの先端をチロリと舐めたら、

「な、なにしてるんですかっ」

大慌て、といった様子でひきはがされてしまった。

「なに……って、そりゃ、フ」

「うわあああ、言わないでください、そんな卑猥ひわな言葉！」

「聞いたのはそっちじゃないのよ。じゃあ再起動のための準備運動、とか言っとく？」

「日常の単語に置き換えないでください。パソコンを再起動するとき、思い出しちゃうじゃないですか！」

どれだけ繊細なんだ、この男は。と白い目を向けかけたら、彼は悲しげな表情になり、ぼつり、言った。

「……僕、惟さんにそんなこと、させたかったわけじゃ……」

本当に不思議でならない。男だったらこういうの普通、喜ぶでしょうに。まあ、でも、これでこそ杓か。

数秒悩んだ後、あたしはえいやつと彼を押し倒し、失礼してその上にまたがらせていただいた。

「わかったわ。じゃあ、口でするのはやめる。それならいいでしょ」

いいわよね。

腰を落として、脚の付け根でソレを捉えたのは、挿れるためじゃあない。ただ、擦こすりつけていじめるためだ。

洗い流したはずなのにぬるりとするのは、先程受けとめた液体が出てきたからだろう。

「ゆいさん、っ！」

「これ以上の拒否は禁止」

短いキスで反論を封じ、彼のモノの上でやさしく滑る。前後に、それからわずかに左右にも。

「ん、く、っ」

されるがままになっっている杳の左手を引き寄せ、あたしの胸に触れさせもした。握らせたり、撫でさせたり、時々、唾液を零して滑りをよくしたりして、ぐにゅぐにゅと大胆に。

このくらい激しく揉まれるほうが好きなのよね、実は。

「だ、めです、こんな、ゆ……惟さん……っ」

すると突然、杳が一気に上半身を起こした。

「わ！」

はずみでうしろに倒れ込んだあたしは、あやうくベッドから落下しそうになって、両手でシーツにしがみつくと危ない。

そんな不安定な格好のまま奥まで貫かれる衝撃は、人生初、と言っつていいほど強烈だった。

「んあつ、あ、杳、——っあ、すご、なにこれ、えっ」

「もう、耐えきれないです……っ」

内壁をななめに擦られると、そのたびにビクン、と肩が跳ねた。こんなところ、弱かったんだ、あたし。

「っああ、は、もつと……っ、お願い……動くの、やめないで……っ」

半分はもう、無意識だった。もつと感じたい、昇りつめたい、けれどまだ終わりたくない。なのに、腰を動かしてねだつてしまふ。

臍げな視界。聞こえてくるのは、杳の荒い息遣いと自らの吐息、そして淫らな水音だけ。すごい、杳。杳とするのが、こんなにいいなんて思わなかった。

「よう、杳……っ、きもちいい、あつ、あ、イっちゃっ……っ——」

軽い到達点に、内壁が彼を欲して蠢く。杳は動きをとめようとするけれど、あたしはこれで許すつもりなんてなかった。

「ふあつ、あ、やめないで、もう一回、このままもつとよくして」

快感に吞まれて動けなくなりそうだったけれど、それでも腰を揺らし、彼を下からめちやくちやに攻める。少しすると杳も覚悟を決めたのか、あたしを膝の上に担ぎ上げて最奥にまで押し入ってきた。

「あ、っあ、あ」

達したばかりの体はあちこちが敏感で、頭がショートしそうになる。指先が痺れているだけでなく、全身の感覚がおかしい。漂っている空気さえ甘い、気がする。

「はあつ、あ、あ、杳、よう……っ！」

揺さぶられながら、彼の首にしがみついた。さつきよりもっといい。数倍いい。

内壁はすでにコントロールがきかないほど、痙攣のような締めつけを始めていて――

「……キス、してもいい、ですか……っ」

「う、っん、んん……っ……んん――」

そうして唇を重ね、とろけるような舌を受け入れた瞬間、瞼の裏は真っ白な閃光に包まれたのだった。

その先の記憶は、霧の中ののように朦朧としている。

めちゃくちゃに絡み合って、あたしは多分、年甲斐もなく乱れたのだと思うけれど。

「好きです。惟、さん、大好きです……」

不思議と後悔などなくて、むしろ、幸福感ばかりを得たというのが実感。

「ごめんね、あたし、鈍感で」

なかなか杳の気持ちに気付けなくて。

小声で詫びて、寄り添ったまま目を閉じる。あつたかい。しかし二度寝をしようにも、すっかり目が冴えてしまつてできそうにない。

と、クウクウとかすかな寝息が耳元で響いたから、あたしは頬を緩めてしまった。

やだ、二十六の男が立てる寝息じゃないでしょ、それ。いまだき、子猫だつてもっとデカいびきをかいて寝るわよ。しからば杳は、子猫以下の小動物ってことか。

「……ゆい、しゃ……ん……クウ」

「ぶはっ」

鼻血を出さんばかりの勢いで噴き出してしまった。可愛い。可愛すぎて、三年先まで癒された気分だ。

こんなに可愛いフリーの男子がこの世にまだ生息していたなんて、神様ありがとう。すっかり頂戴いたしました。

独立してからというもの、恋愛なんて二次で、がんがん働いてはシングルライフを楽しんできたけれど、そこで培った価値観がちやぶ台返しみたいにひっくり返されてしまった気分だわ。

この先、恋人を作るなら自分より年収が上の人と決めていたし、利口でしたたかな男が相手なら五分五分の関係でうまくやれるんじゃないか、なんて思っていたけれど、はっきり言ってそんな関係、あつてもなくてもあたしにはどうでもよかったのだらう。きつ

と長くは続かない。だって癒されないもの。

そうか、あたしに必要なのは可愛いお嫁さんだったわけね。納得。

「杓。よう、起きて」

もももどとかき分け進んだシーツの中で足を絡め、ささやく。胸に手を乗せると、意外にもしっかりした筋肉がそこにあった。案外腕力があるんだな、というのも昨夜発見したこと。

東の空が白んできた。月影の名残りが、溶けかかった氷のように空へと馴染みはじめている。

美味しい朝食タイムは近い。だけど、その前に。

「うむ、ゆい、しゃん」

「……ねえ、もう一回襲っちゃってもいい？」

「んう……？」

可愛いお嫁さんをおかわり希望。

何度も抱きしめて、その柔らかい髪をめちゃくちゃに撫でるの。

そうしたら、きっと今までに見たことのないようなびかびかの朝日がのぼるから。クリスマスのイルミネーションより、ずっとずっと綺麗な一日がやってくるから。

そんな気がして、あたしはなんだか、朝になるのがとても楽しみだった。

5

年末年始と聞いて、真っ先に思いつくのは忘年会および新年会だろう。

年中行事という大義名分を掲げてだらっと飲みまくる、素晴らしきかなニッポンの風習。翌朝は後悔の塊と化すあたし、それでも飲まずにはいられない。とはいえ、別にうつぶんが溜まっていたりとか、ウサを晴らしたいとかじゃあない。

年明けから春までの期間には憂鬱なアレが待っているから、その現実を忘れただけなのだ。

そう——他人まかせにしてばかりでもいられないアレ。この上なく面倒な作業にもかかわらず、サツパリ儲からないアレ。

……確定申告！

事務所を構えているとはいえ、あたしの稼ぎではまだまだ個人事業主レベルだ。従業員はいるけれど、アルバイトレベルのお給料しか払えていない。もっと還元してあげたいとは思っているのだけれど、現実はなかなか厳しい。